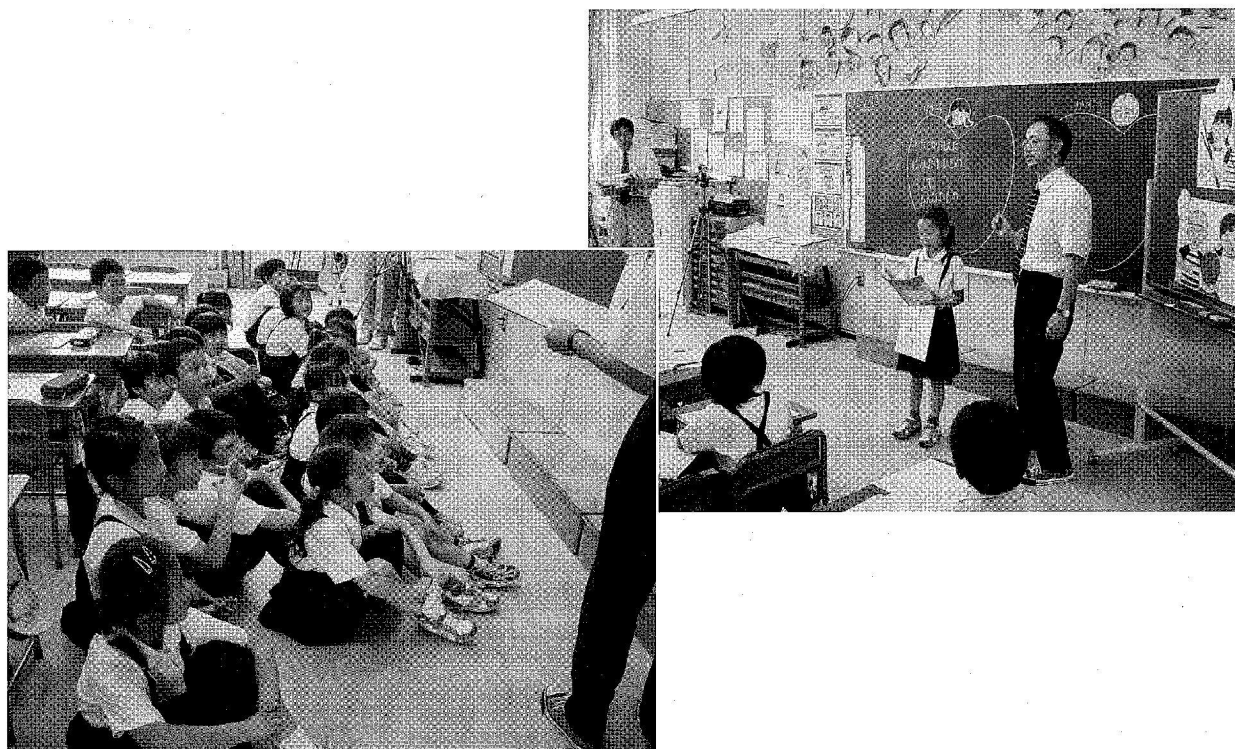


「道徳」の研究

捧 信之



🔑 キーワード

他者理解 第三者の視点 バランスのよい価値観

🎯 主張

本研究は、「仲間とともにによりよく生きるための、他者理解に基づいたバランスのよい価値観」を創りあげていくことを目指している。

仲間とともにによりよく生きていくためには、一方的な価値観に偏るのではなく、相手の立場や気持ちを理解したバランスのよい価値観をもつことが大切である。

これまでの「道徳」は、それぞれの登場人物の心情に深く寄り添うことが重視されてきたが、生じている問題を解決していくことには必ずしもつながっていない面があった。そこで、第三者の立場に立ち、それぞれが納得できるような解決策を考えていくことを積み重ねることで、自分の中に第三者の視点を持ち、バランスのよい価値観を創りあげることができると考えた。

I 仲間とともにによりよく生きるための、他者理解に基づいたバランスのよい価値観を創りあげる「道徳」

1. 「道徳」で求める子ども

「道徳」で求める「新たな概念・認識・価値観」は「仲間とともにによりよく生きるための、他者理解に基づいたバランスのよい価値観」である。

仲間とのかかわりが弱くなっている子どもたち。その子どもたちが仲間と良好な関係を築いていくためには、一方に偏らず、様々な立場にある仲間の気持ちを理解するバランスのよい価値観を創りあげることが大切である。

これまでの「道徳」は、それぞれの登場人物の心情に深く寄り添うことが重視されてきたが、そこに生じている問題を解決していくことには必ずしもつながっていない面があった。それぞれの心情を理解し、どちらも納得できるような解決策を考えていくためには、一方に偏らない第三者の視点をもつことが大切である。そこで、問題場面における第三者の立場に立ち、トラブルを起こしている当事者それぞれの立場や気持ちを理解しながら、お互いが納得できるような問題の解決策を考えていく学びを進める。そのような授業を積み重ねることで、自分の中に第三者の視点をもつことができるようになり、バランスのよい価値観の形成へとつながっていく。また、自分が当事者になったときも第三者の視点を自分の中にもちながら、自分の思いだけでなく相手の立場や気持ちを考えながらより適切な行為を考えていこうとする構えをはぐくむことができると考えた。

2年次研究では、主に内容項目2（3）信頼・友情に重点を置いて授業を構想してきたが、今年度は、第三者の立場で考える授業を他の内容項目にも広げていこうと試みている。

2. カリキュラム改善の視点

各学期に「第三者の立場で考える道徳授業」を複時数扱いの重点主題として設定していく。

これまで、1学期は、主に「仲よく・信頼」に視点を置き、2学期は、主に「協力」に視点を置いてきた。また、1学期は、主に遊びの中や個人的な問題に視点を置き、2学期は、主に学級での活動や学級全体の問題に視点を置いてきた。そうすることで、主に仲間づくりの時期である1学期では、遊びの中や学習の中で個々のつながりをつくっていくことに有効に働くと考えた。また、学級集団を高めていく時期である2学期では、互いに協力しながらよりよい学級をつくっていこうとすることに有効に働くと考えた。

「信頼・友情」に限らず、様々な価値内容においてバランスのよい価値観を形成することは大切である。そこで、今年度は、これまでの考え方を大切にしながらも、他の価値内容で「第三者の立場で考える道徳授業」を複時数扱いの重点主題として設定していくこととした。

3. 授業改善の方策

	学 習 過 程	教師の働きかけ
第1の過程 (道徳的問題場面の状況理解)	<p>＜道徳的問題場面との出会い＞</p> <p>Aさんはかわいそうだな。でも、Bさんの気持ちも何となくわかるよ。</p> <p>◎それぞれの登場人物はどんな気持ちなんだろう</p> <p>Aさんの気持ちわかるな。でも、Bさんの気持ちもわかってきたよ。</p> <p>何とかこの問題を解決してあげたいな。</p>	<p>○問題場面の提示</p> <p>・登場人物の立場や気持ちについて話し合う活動の組織。</p> <p>← 感性</p> <p>「それぞれの登場人物の立場や気持ちに目を向ける力」</p>
第2の過程 (状況理解に基づいた行為の妥当性の検討)	<p>この問題を解決していくためにはそれぞれの登場人物の気持ちを大切にしたい方がよさそうだな。</p> <p>◎それぞれが納得してくれるためにはどうすればよいのだろう。</p> <p>そのためには、それぞれの立場や気持ちを考え、どちらも納得できるより妥当な行為を決めていかなければならないな。</p> <p>こうすればそれぞれが納得してくれるよ。うまくいきそうだね。</p>	<p>← 科学的な感性</p> <p>「第三者の立場で、それぞれの登場人物の立場や気持ちを考えながら解決していこうとする力」</p> <p>○問題を解決するために、より妥当な行為を考えていく話し合いの組織。</p> <p>○実際に演じることでより妥当な行為を探っていく活動の組織。</p> <p>○より妥当な行為を決めていくために、どちらも納得する行為を自分カードへ書く活動の組織。</p> <p>← 科学的なものの見方・考え方</p> <p>「それぞれの気持ちを考え、こうすればよさそうだと考えた行為の妥当性を検討し、より納得できる行為を決めていく力」</p>
第3の過程 (自分自身の成長とよさの感得)	<p>◎学習を通しての自分の心の成長を振り返ろう。</p> <p>最初はAさんがかわいそうだと思っていたけれど、よく考えるとBさんもかわいそう…。これならそれぞれが納得できそう。</p>	<p>○自分の心の成長を振り返る「心の成長作文」を書く場の設定。</p>

4. 評価の方法

2年次研究では、授業の中における発言や表情、自分カードへの記述などから「新しい概念・認識・価値観の形成」を見取ってきた。3年次は、学習の終末において自分の成長を振り返る「心の成長作文」を書くことを取り入れる。その中で、学習を通して自分の心がどう変わったか、どう成長したかを記述してもらい、「新しい概念・認識・価値観の形成」を見取っていく。

Ⅱ 実践

第2学年

「だれのもの」主な内容項目2(3) 信頼・友情

1. 第三者の立場に立ち、それぞれの気持ちを考え、お互いが納得できるような解決策を考えていきながら、バランスのよい価値観を創りあげていく学び

本主題では、捕まえたザリガニを誰が飼うかで仲違いになってしまう問題場面を取り上げる。一緒にザリガニ捕りに行った「ぼく（わたし）」の立場で、やっとなら捕まえたザリガニだから自分で飼いたい「かずき」の気持ち、みんなで捕りに来たんだからみんなで飼いたい「りさ子」の気持ち、それぞれの気持ちに目を向けることで、両方の気持ちを思いやりながらお互いが納得できる解決策を考えようとする。そのことにより、一方に偏らない「バランスのよい価値観」を形成することができる考えた。

2. 主題の構想

(1) 主題の目標

ザリガニ捕りに行って仲違いになった場面でのりさ子とかずきの気持ちを明らかにし、二人とも「いいよ」と言ってくれるためにはどうすればよいかを考えていく中で、互いの気持ちを理解しながらそれぞれが納得できる解決方法を決めていくことが大切であることに気づき、仲間とともに仲よくしていこうとする意欲を高めることができる。

(2) 追求の構想（3時間）

問題場面の提示（概略）

りさ子、かずきとぼく（私）の3人で池にザリガニ捕りに行く。みんな一生懸命探した末に、かずきがザリガニを捕まえる。「よかったねえ。」と、かずきを讃え、りさ子とぼくもまた頑張って探す。結局かずきが捕まえただけで日が暮れてくる。帰り際、池を教えたりさ子は「みんなで捕りに来たからそのザリガニはみんなで飼おうよ。」と言う。しかし、かずきは「でも、ぼくが見つけたんだからぼくが飼いたいよ。」と言う。りさ子は「みんなで捕りに来たのに自分だけのものにするなんて卑怯だよ。」と言い、言い争いになってしまう。それを見ていたぼくはどうすればよいのか困ってしまう。

りさ子が言うようにみんなで飼った方がいいと思う かずきがつかまえたんだからかずきが飼った方がいいと思う

◎りさ子やかずきの気持ちを考えよう。

りさ子…みんなで捕りに来たんだからみんなで飼いたい かずき…ぼくが捕ったザリガニに、自分が飼いたい 等

◎二人とも「いいよ」と言ってくれるには、ぼく（わたし）は何と言えよいのだろう？

みんなで捕りに来たんだからみんなのザリガニにした方がいいよ かずきが捕まえたんだからかずきが飼えよいいよ

役割演技や話し合いでどうすれば二人とも「いいよ」と言ってくれるか考えよう。

かずきのザリガニにして一緒に学校で飼えよいいんじゃない かずきの家でみんなで飼えよいいんじゃない 等

この学習を通して自分の心の成長を振り返ろう。

最初はりさこの気持ちしわからなかったけど、かずき 最初はかずきの気持ちしわからなかったけど、りさこの気持ちもわかってきたよ。

相手の気持ちをよく考えるようになったよ。

人の気持ちを思いやるようになったよ。

3. 授業の実際

(1) かずきさんが捕まえたんだからかずきさんが飼えばいいと思うけど…

(道徳的問題場面の状況を理解する第1の過程)

浩助さんは、素直に自分の考えを表現するよさがある。また、自分の考えにこだわりをもちながら物事を判断していくよさがある。ただ、こだわりが強いためにやや見方が偏ることもある。そこで、本主題では、素直に考えるよさを生かし、それぞれの立場や気持ちを理解しながら、二人とも納得できるような解決方法を考えていくことで、一方に偏らないバランスのよい価値観を創っていくことを願った。

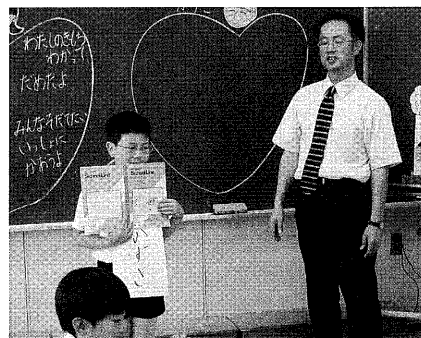


場面絵 (自作資料)

問題場面を話した後、隣の沙希さんが「みんなで飼った方がいい!」と大きな声でつぶやく。周りからも「ぼくもそう思う。」などの声が聞かれる。浩助さんはそれを聞いてちょっととまどったような表情を浮かべた。「浩助さんはどう思うの?」と教師が尋ねると、普段はよくしゃべる浩助さんが口ごもってしまう。「考えがまだまとまってないんだね。また、後で聞かせてね。」と、その場は考えを聞くことをやめて授業を進めた。発言の中で「りさ子さんはみんなで飼いたいと思っている。」と、りさ子の気持ちに目を向けた意見が出てきた。そこで、二人の気持ちに目を向けるために、ノートに書いたり役割演技をしたりする活動を組織した。

りさ子のきもち
3人でかいたいなあ。
かずきのきもち
ザリガニかいたいな。
ぼくだってかいたいよ。
このザリガニはぼくがなん十ぶんもたって
つかまえたんだよ。

二人の気持ちを書いた浩助さんのノート記述



かずきの気持ちを話す浩助さん

浩助さんは上記のようにノートに記述し、役割演技でも「ぼくが何十分もたって捕まえたんだからぼくのものにしておいてよ。」とかずきの気持ちになって話をしてきた。学級全体は「かずきがわがままでりさ子が正しい」と、とらえる子どもが多かったので、「やっとなで捕まえたザリガニだよ。浩助さんが言ったように自分で飼いたい気持ち、先生もよくわかるなあ。」と投げかけた。「うん、それはわかるよ。」と、多くの子どもがかずきの気持ちにも寄り添ってきた。「かずきの気持ちがよくわかる人。」と教師が問うと、浩助さんはすかさず挙手、「りさ子の気持ちがよくわかる人。」と問うと、「微妙。」とつぶやき少し間をおいて挙手した。りさ子の気持ちを十分理解するまでには至らなかったが、「感性:それぞれの登場人物の立場や気持ちに目を向ける力」を働かせて、かずき・りさ子双方の気持ちに目を向け始めている浩助さんである。

(2) 何と云えば二人とも「いいよ」と言ってくれるかな？

(状況理解に基づいた行為の妥当性を検討する第2の過程①)

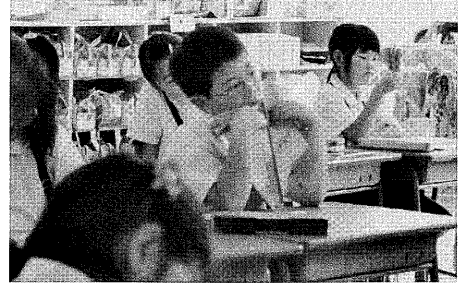
浩助さんや多くの子どもが「どうすればいいんだろう」と迷ってきたので、「◎二人とも『いいよ』と言ってくれるには、ぼく（わたし）はどうすればよいのだろう？」と問いかけた。

浩助さんは、ノートに次のように記述した。

◎二人とも「いいよ」と言ってもらうには、ぼく（わたし）は何と云えばよいのだろう？

りさ子さんのうちの近くで池でへやをつくってそこでせわをすればいい。

浩助さんのノート記述



しばらく考え込む浩助さん

浩助さんは、最初「りさ子さん、かずきさんに飼わしてあげれば」とノートに記述した。しかし、しばらく考えてその記述を消し、代わりに上記の文を記述した。かずき寄りの浩助さんが「科学的な感性：第三者の立場で、それぞれの登場人物の立場や気持ちを考えながら解決していこうとする力」を働かせて、りさ子の立場や気持ちを考えた解決策を考えてきた姿である。

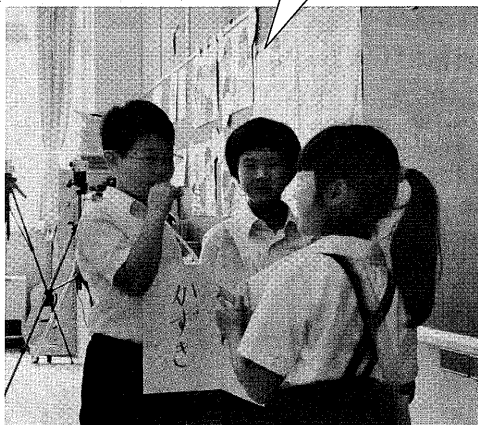
(3) これなら二人とも「いいよ」と言ってくれるよ！

(状況理解に基づいた行為の妥当性を検討する第2の過程②)

2時間目、浩助さんは自分の考えに自信がもてないようで挙手してこない。ノートをじっと見たり、鉛筆をくわえたりしながら悩んでいる。そして、またノート記述を消し、「みんなで飼いたいのだったら学校で飼えばいい。」と書き直す。どうすればよいのか自問自答している姿である。話し合いだけではなかなかよい解決策が浮かんでこないと判断し、3人グループでかずき、りさ子、ぼくになってお互いが考えてきた解決策を言い合う役割演技を行う活動を組織した。

「かずきさん、みんなで一緒に飼おうよ。」

「えー、でもなあ…。」



3人グループで役割演技をする浩助さん

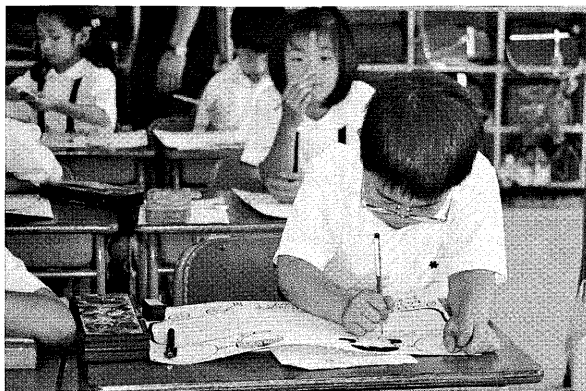
浩助さんは、他の子どもの解決策を聞くが、「でもなあ。」「えーちょっと。」などと言いながら納得する解決策を見つけられないでいた。

その後、再び全体の話し合いを組織した。その中で、英恵さんが「月火土はりさ子さんで、水木金はずきさんで、日曜はわたしがいいんじゃないですか。」と発言、それを聞いた浩助さんは挙手し、「英恵さんに似てるんですけど、土曜がりさ子さんで日曜がかずきさんがいいんじゃないですか。」と発言する。さらに、宗平さんが「池で飼えばいいんじゃないですか。」と発言すると、浩助さんははっとしたように強く挙手し、「宗平さんに似ているんだけど、池で部屋を作ってみみんなで世話をすればいいと思います。」と、一端は消した自分の考えを勢いよく発言した。



発言する浩助さん

それぞれ考えがまとまってきたと判断し、最終的な自分の考えを自分カードに書くよう促した。



自分カードに最終的な考えを記述する浩助さん

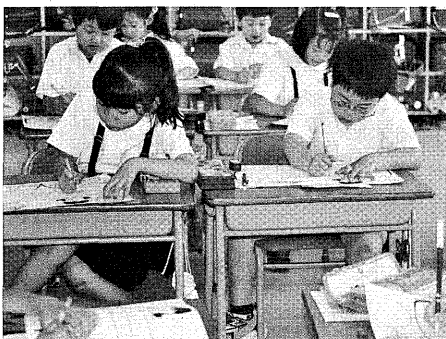


自分カードの記述

浩助さんは、「科学的なものの見方・考え方：それぞれの気持ちを考え、こうすればよさそうだと考えた行為の妥当性を検討し、より納得できる行為を決めていく力」を働かせ、悩みながらも英恵さんや宗平さんの考えを取り入れ、最終的に納得のいく自分の考えを決めることができた。

(4) 自分の心の成長を振り返ろう。(自分自身の成長とよさを感じ得る第3の過程)

3時間目は、これまでの学習を振り返り、自分の心の成長作文を書く場を設定した。



「心の成長作文」を書く浩助さん

最初はずきさんの気持ちしかわからなかったです。でも、りさ子さんの気持ちもだんだんわかってきました。宗平さんの意見で気がつきました。池でプラスチックの箱の中でみんなで世話をすればいい。

自分のどんな心が成長したかは、相手の気持ちがわかるようになったことです。

「心の成長作文」の記述

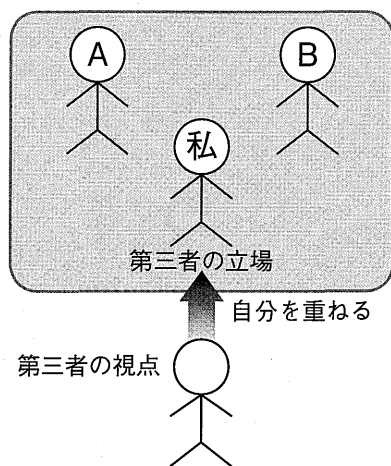
「かずきさんはやっぱり自分で飼いたいと思う。」という自分の考えにこだわりながらも、何とかりさ子の気持ちに答えたいと、終始悩みながら学習を進めてきた浩助さん。上記の記述から「自分とは異なる考えについて理解できたことが自分の成長である」と自己評価している。

この学習を通して、仲間の意見を聞きながら自分の中にかずき・りさ子それぞれの気持ちを考えたバランスのよい価値観を形成していった浩助さんの成長の姿を見ることができる。

Ⅲ 成果と課題

成果1

「第三者の立場」に立つことで、自分の中に「第三者の視点」をもつことができる。第三者の視点は、一方に偏らない視点であるとともに、双方を理解する視点でもある。この視点をもつことでバランスのよい価値観を形成していくことができる。



「道徳」で求める「仲間とともにによりよく生きるための、他者理解に基づいたバランスのよい価値観」を形成するためには、「第三者の立場に立ち、それぞれの立場や気持ちを理解しながらお互いが納得できるような問題の解決策を考えていく学び」を展開することが有効であることが、ある程度明らかになってきた。本実践でも、最初は一方に偏っていた浩助さんの価値観が、授業を通して双方を理解する視点を持ち、バランスのよい価値観を形成していったことが見えてきた。

今後は、価値内容を2(3)信頼・友情だけに限らず他の価値にも広げていくことを試みていく。

成果2

問題の状況を的確にとらえ、心情を的確にとらえていくことで、問題が深まり、解決の見通しもより妥当なものとなる。

第1の過程では、「みんなで飼えばいい」というりさ子寄りの考えが多く出され、「自分が飼いたい」かずきはわがままだという考えが学級全体に強まった。そこで、「やっと見つけたかずき」という考えを出し、かずきの気持ちに寄り添えるよう投げかけた。そのことにより、りさ子、かずき両方の気持ちを考えて解決していこうという「科学的な感性の働き」へとつなげることができた。このように、第1の過程での、「感性」の働きによる登場人物の立場や気持ちのとらえが、第2の過程の展開を大きく左右する。したがって、この段階で状況、心情を的確にとらえることが非常に重要である。

課題

どちらも納得できる解決策について役割演技をすることの有効性を探る。

それぞれの立場や気持ちを関連づけてよりよい方法を考えていくときに役割演技を取り入れたが、有効に働いたか疑問が残った。そこで、以下の点について改善を図っていく。

- (1) 子どもの意識（必要感）に沿って、役割演技を取り入れる。
- (2) それぞれの気持ちを考えた役割演技の評価の視点を子ども自身がもつ。

<主な参考文献>

永田 繁雄／服部 敬一 2004 「研究授業 小学校道徳 低学年」 明治図書

柳沼 良太 2006 「問題解決型の道徳授業～プラグマティック・アプローチ」 明治図書